大学入試改革はどうなっていくか

2020年度の大学入試改革でセンター試験に代わる「大学入学共通テスト」が実施されることになった。新しい入試が盛り込まれている。記述式、英語の外部試験利用などだ。このことについて、各方面からさまざまな意見が噴出している。国語の記述式問題は公平に採点できるのか？英語の外部試験利用はどの試験を使うのか？課題や矛盾を抱えながら2020年に向けて突き進むこの改革で大学入試はどう変わるのか。

※平成29年7月13日、文部科学省から新たに高大接続改革の実施方針が発表されました。最新の内容はこちらをご確認ください。

文　安田賢治（大学通信　常務取締役）

5月、文科省は「大学入学共通テスト実施方針」を公表した。

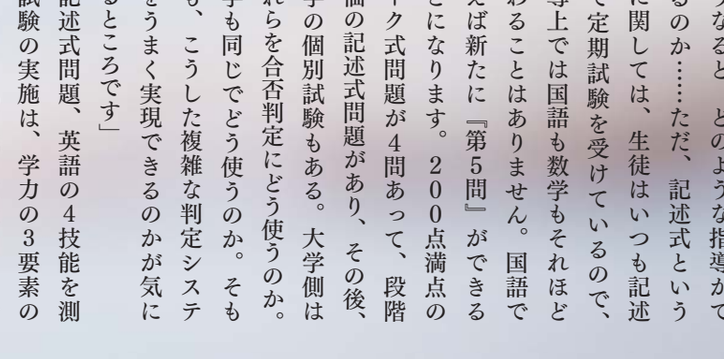
これによると、まず試験の名称が変わる。センター試験の代わりに実施される「大学入学希望者学力評価テスト（仮称）」と言われていたのが、「大学入学共通テスト」（以下、共通テスト）になった。

この共通テストの目玉は記述式試験の実施だ。予告通り国語と数学で実施される。いずれも現行のセンター試験と同じマーク式の時間割の中で実施し、新しく記述試験だけで別の時間を設けては実施しない。国語の出題範囲は「国語総合」（古文、漢文を除く）の内容とし、マーク式に加えて大問を用意し、そこで80～120字程度で解答する問題を3問程度出題する。

設問においては一定の条件を設定して解答する問題となる。記述式が加わることにより、国語の試験時間を現在のセンター試験の80分から100分に延ばすと発表した。記述式問題に関しては段階評価で3～5段階になる。

さらに、数学も数学Ⅰ、数学Ⅰ・Aの科目で記述式問題が出題される。出題範囲は数学Ⅰだ。問題数は3問程度で、マーク式問題と記述式問題を混在して出題する。解答を書きこむ記述式で紛れがない出題だ。数学の解答時間も延長し、現行のセンター試験の60分から70分に延びる。いずれもセンターが作問、出題、採点を行い、採点に関しては民間業者を有効活用することになる。毎日新聞社大学センターの中根正義センター長はこう話す。

「これまでの文科省の取材で、記述式試験を実施すると明言していましたから、さほど驚く結果ではありません。ただ、これだけではなく、今年の2月末～3月初旬にかけて、MARCH（明治大、青山学院大、立教大、中央大、法政大）、関関同立（関西大、関西学院大、同志社大、立命館大）などの大学に、記述式試験を実施してくれと文科省から要請があったという話を聞きました。国立大が2次試験で記述式試験を行うという方向性が出てきたので、次は大手私立大が一般入試で記述式をやるようになれば、話が動いていくだろうという考えなのでしょう。しかし、人気私立大は受験者数が多く、簡単に記述式試験をできる状況にはありません。そのため、文科省が何らかの形で予算措置をすることも視野に入れ、入試に記述式問題という流れを作っていくようです。これまで、大学通信、駿台予備学校、毎日新聞社で『高大接続　教育改革シンポジウム』を東京・大阪で7回実施してきましたが、文科省の方がいつも記述式については条件付きで実施すると話していたのが印象的でした。ただ、記述式問題の採点をどうするかというのは難しい問題です。短期間で採点を行うのが難しいこと、公平性の確保という点と、当然、受験生から採点の開示を求められることを考えると時間も手間もかかります」



採点に時間がかかるというのはよくわかる。およそ50万人が受験して、複数の採点者が一つの答案をチェックするとなると、人数も時間も必要だ。その上、採点の公平性を考えると、採点の基準の統一はもちろん、採点の能力が求められることになる。難関私立大が記述式試験を実施するとなると、おそらく、別日程での実施になると見られる。駿台教育研究所進学情報事業部の石原賢一部長が言う。

「この共通テストの記述式問題の導入は、ある面で40年間の受験指導のノウハウをぶち壊すものです。まず自己採点がうまくできない。そうなると、どのような指導ができるのか……ただ、記述式という点に関しては、生徒はいつも記述式で定期試験を受けているので、指導上では国語も数学もそれほど変わることはありません。国語でいえば新たに『第5問』ができることになります。200点満点のマーク式問題が4問あって、段階評価の記述式問題があり、その後、大学の個別試験もある。大学側はそれらを合否判定にどう使うのか。数学も同じでどう使うのか。そもそも、こうした複雑な判定システムをうまく実現できるのかが気になるところです」

記述式問題、英語の4技能を測る試験の実施は、学力の3要素の一つである「知識・技能」だけではなく、「思考力・判断力・表現力」を試し、最後は「主体性・多様性・協働性」を評価する試験を行うということだった。現在の試験はあまりにも知識・技能に偏り過ぎて

いるので、これを改善していこうとの考えだった。ところが、記述式や英語の4技能試験の実施方法などに注目が集まり、本来の目的が見過ごされてしまっているようだ。中根氏は「記述式試験については、結局、ある程度の最低基準を明確化して、模範解答に合わせたものを記述するのであれば、いわゆる個性とか表現力といった新しい学力観を伸ばすものにはなりません。もはや、記述式の目的を見失っています」と指摘する。

気になるのは、マーク式で行っている自己採点が、国語の記述式問題でも可能なのだろうか。正答例は提示されると見られる。石原さんに聞いた。

「共通テストを紙でやっているうちは生徒に問題を持って帰らせると思うので、問題自体は手に入ります。どのような評価だったかを集めることができれば、どの程度ならどのような段階評価を得られるか分析可能で、それを反映した模擬試験を翌年以降の受験生には提供できると思います。しかし、最初の2020年度の共通テストと向き合う生徒に関しては、我々が無力さを痛感する資料しか提供できないのではないかと危惧しています。18歳の春は1回しかないのに……これは最悪のシナリオです」

大学入試改革はどうなっていくか

緊急提言

外部英語試験は高3で2回 受験で好成績のほうを採用

共通テストの英語の試験では4技能（読む、聞く、書く、話す）を問うことが決まっている。民間の試験を活用し、現行のセンター試験の英語はA案では2020年度から廃止、B案では2023年度まで実施するが、その後は廃止する。いずれにしてもセンター試験の英語の廃止後は、すべて民間の試験の成績を活用することになる。その成績をCEFR（セファール）の6段階評価に照らし、2次試験の出願資格や試験免除、得点の加算に使うという。民間の試験の受験回数は、高3の4～12月までの間の2回とし、浪人については日程を別途検討するとしている。外部試験はさまざまあるが、どれを使うのかまだ決まっていない状況だ。47都道府県すべてでの試験実施や学習指導要領にそった出題との制限がある。さらに、受験料を安くすることが求められるので、どこまで民間の会社が協力するのかは不透明な状態だ。ただ、50万人以上が2回は受験するというのは、試験を実施している会社にとっては魅力的な市場といえるのではないだろうか。大半の高校3年生は外部英語試験を受けていないのだから、新しい層を国が掘り起こしてくれたことになる。受験料が5千円でも50万人が受ければ25億円にもなる。ただ、高校にとっては、どの試験になるか早く決まらないと、来年、入学してくる共通テスト1期生となる生徒のための外部試験対策をどうするかも決められないことになる。

また、当然ながら、外部試験の中で、点数の取りやすい試験に受験者が集中することになるが、初年度はそれがどれかの見極めも難しい。英語の得意な生徒の点数が伸びる試験、苦手な子の点数が伸びる試験など、さまざま出てくると考えられる。さらに、日程的な面も心配だ。4～12月といっても、受けることはできてもいい成績を取らないことには入試で不利になる。そうなると、7月くらいに実施される試験が人気になると見られる。また、2年生の時に試し受験する生徒も増えそうだ。

段階評価になるのも不公平感が出るのではないかとみられる。現行のセンター試験の英語は筆記試験200点、リスニングテスト50点で、計250点満点だ。言ってみれば250段階評価だったのが6段階に集約されることになる。逆に差がつかず、英語の得意な受験生が点を伸ばせない可能性もある。石原さんは「英語の得意な生徒は英語はCEFRの6段階評価、数学の得意な生徒は1点刻みの点数評価。おかしいと思いませんか。段階評価は粗い評価になります」と話している。

入試改革で入試は混乱必至か？

この制度改革でも、おそらく私立大は共通テスト利用入試を実施すると見られる。記述式を得点に換算すれば可能になるからだ。現在のセンター試験利用入試は私立大延べ志願者の3割を占める人気だ。これをやめてしまうと、大学は受験料収入が見込めないし、受験生も他の地方にある大学への出願がしにくくなる。その大学まで足を運んで受けなければならないからだ。経済的負担も大きくなる。そのために存続するのではないだろうか。

ただ、今までの例を見ても入試改革の初年度は大混乱が起きる。2年前の2015年度入試では数学と理科が先行して新課程に切り替わった。この年のセンター試験の理科では、過年度卒業生の平均点が高くなり過ぎ、史上2度目の得点調整が行われる混乱が生じた。2020年の入試改革でも混乱が生じる恐れは高い。中根さんはこう話す。

「今の状態では混乱しそうです。今春のことを思い起こしてほしいのですが、方針が3月末～4月初旬に出ると言われていましたが、延び延びになり、結局6月に出ることになった。文科省担当の記者からの話を聞いても、文科省の幹部とワーキングチームとのズレがあるようにも感じられます」

では、入試改革初年度の入試はどうなるのか。石原さんに聞いた。

「1979年の共通一次試験導入時のことを思い浮かべていただきたい。あの時は受験生の負担が重くなりました。文系・理系とも社会と理科は2科目ずつ、計1000点満点になり、しかも受験校はそれまでの1期校、2期校の2回受験チャンスがあったのが、1校受験になり志願者がものすごく減りました。志願倍率は東大が2・5倍しかありませんでした。全員合格の1・0倍のところもあったほどです。その代わり私立大の出願が増えました。私立大はそれまでと変わらず3教科入試だったからです。今回も同じことが起きるのではないでしょうか。それよりも入試改革が実施される前年、後がないと考える受験生が弱気になる可能性があります。つい最近だと2014年度入試がそうで、浪人すると新課程の入試になってしまうので現役志向が高まり、翌年は15％くらい浪人生が減りました。2020年度は、3～4割減るのではないかと予備校としては戦々恐々としています。ただ、国公立大の志願者数はそんなに減らないと思っています。今回の改革は、受験生からすればそれほど科目の負担増はありません。記述式は当たり前、英語4技能だけが問題なのです。英語4技能については外部検定試験なので、2次試験への出願要件としてはそれほど高い難度は想定されません。高校卒業レベルぐらいになると思われるので、受験生からすればそれをクリアすることはそれほど難しいことではないでしょう」

共通テストが始まる年に、入試が混乱することは間違いないところだ。現在の高校1年生、最後のセンター試験を受ける受験生にとっては、浪人すると外部の英語試験を受けなければならない。それは大きな負担増となる。しかし、現役生にとってはみんなが受けることで、その上、それまでに対策を取ってきていることでそう敬遠することもない。そのため、国公立大の志願者が大きく減る可能性は低いということだ。ただ、私立大人気が高まる可能性は高い。過去問が活用できるわけで、入試に対する不安はないが、共通テストへの不安は大きくなる。さらに、前年の入試が安全志向になるというのは注目されよう。こういう時こそ、強気に志望校を設定するような指導も必要ではないだろうか。